

おはよう講座①

『特別支援教育時代の光り輝く映画たち』で語ったこと

二通 論 (札幌学院大学人文学部人間科学科)

アナ雪のエルサから始まって、「サウンド・オブ・ミュージック」のマリア、任侠映画の高倉健、寅さん、三島由紀夫、寺山修司、ジョン・レノンと実母のジュリア、森繁久弥演じる森の石松、山田洋次に大島渚、若尾文子に小沢昭一、今村昌平に小津安二郎…。特別支援教育精神という角度から眺めるなら、なかなかどうして、みんないい、のです。「おわりに」から)

本書のコンセプトは、「読みたくなる本」です。となれば、自分が読みたい本を書くという事です。なるほど目次を見ると、これが筆者の世界観なのです。筆者なりに世界の共通項が見えかかってくる、一寸ワクワクする感じなのです。見えてきたもの、それは、両極に離れていた人たちが、結局、中心に向かって歩き出しているという風景です。

本書完成後、「おおかみ子どもの雨と雪」「バケモノの子」の細田守監督を被写体とするドキュメンタリー番組で、細田は、吃音障害があり特殊学級に在籍していたと語っているではありませんか。(NHK プロフェッショナル 仕事の流儀 2015・8・3放送)

そこにあるのは、障害がもたらす創造の力、障害の内に潜む肯定的な意味です。

筆者は、「おおかみ子どもの雨と雪」について、「あえて差別される側に回るという思想の高み」として1節設けています。

小林信彦が週刊誌のコラムで、若尾文子について以下のように述べています。

「代表作は「妻は告白する」といわれていたが、近年では「清作の妻」が若尾文子のトップ作品ではないかと思われるようになった。少なくとも、「赤い天使」を加えて、この三本を見ていないと、若尾文子の妻は語れないであろう。」(週刊文春 「本音を申せば」連載第 856 回 2015・8・13)

筆者は、「赤い天使」についても、「セックスボランティアとしての従軍看護婦としての実践」として1節設けています。「清作の妻」については、巻末のチェックリスト「視覚障害」の項に入れました。なにしろ、夫の日露戦争出征を阻止するために夫の眼を五寸釘で潰すのですから。若尾自身も「清作の妻」をベストワンと位置づけているようです。

「サウンド・オブ・ミュージック」も、50周年を記念して日本語吹替版が上映されています。ジュリー・アンドリュース演じるマリアは、いまなら ADHD として括られる人物です。となれば ADHD 讃歌ムービーとして重要な位置を占めます。「男はつらいよ」シリーズの寅さんもそうです。「ノーウェアボーイ」で描かれるジョン・レノンの実母のジュリアもそうです。

「タリウム少女の毒殺日記」は、近年の難題である「実験・観察型殺人」への一つの回答たりえています。ただし、作品本体に加えて評論・解説の力が必要です。

本書は、特別支援教育精神を養う映画を本文で 77 作品、巻末のチェック表で 263 作品取り上げています。